

〈論文〉

地域レイヤードとフィールドワーク ～熊本学園大学周辺地域を事例に

高木 亨

要旨

地域レイヤードは、地域の特徴や空間の法則性を理解するための視点であり、歴史的な重層性を重視して地域を捉える手法である。田中啓爾の地位層の概念を活用し、地域の実態把握や地域性の解明を試みた。熊本学園大学周辺地域を事例に、田中の5段階層序を応用して歴史的な積み重なりを整理した。熊本市街地から軍事施設が移転してきたことにより地域が大きく変容したが、戦後文教地区に成長していく背景が明らかになった。

キーワード 地域レイヤード, 田中啓爾, 軍事施設, 熊本市, 熊本学園大学

1. 本研究の目的と対象地域

本稿では田中啓爾の地位層および5段階層序の発想を起点に、地域の特徴を視覚的かつ実質的に把握し明らかにするとともに、地域資源の発掘等地域の魅力づくりに寄与する視点の提供を目指すものである。そこで地域をみる視点として地域レイヤードという視点の導入を試みる。

今ある地域の姿は、様々な要因により地域の事象が寄せ集められたものだといえる。こうした多様な事象を読み解き地域性を明らかにしていく視点には、地理学者田中啓爾(1885～1975)の「地位層」の考え方がある。田中の地位層は地域にある歴史的背景や多様な機能を持つ事象を時間軸で整理し、地層のように重なって地域に存在しているものとして捉えた。こうした地位層の考え方を援用して、今ある地域の姿を再構築すると、これまでその地域が歩んできた歴史に応じた時代ごとの特徴を重ね合わせた姿、衣類に例えるならば「重ね着」した姿と考えることができる。それは地域ごとに異なる「着こなし」をした姿であり、地域固有の特徴として捉えることができる。

本稿では、その重ね着＝レイヤードとすることで、地域にかかわる人々に対して地域的特

徴をイメージしやすくする考え方を提案する。あわせて、重なり合った時代のレイヤードを解きほぐすことで、その地域の総合的な特徴や地域資源を見だしやすくし、地域づくりへの寄与・応用へつながることを意図した。

これまで、田中の地位層の考え方を元にした地域の見方には、大塚(2002)の「地域層」(その後「地域層位」(大塚;2007))や齊藤(2006)の「文化層序」があった。これらは地域的性格を解明するための視点として、歴史的な重層性を重視して地域の特徴や空間の法則性をとらえようとしたものである。これとは別に瀬戸・高木(2014)は、災害復興に関するプロセスに田中の5段階層序を応用することを提唱している。

また、景観をその視点の中心に据え、地位層を応用し「景観レイヤー」としたものに、須山(2023)がある。須山は景観レイヤーは「対象地域に対する十分な理解を前提」とするものとし「精密な観察と文献・資料渉猟に基づく地域の実態把握が必要」としている。そして奄美大島・名瀬の景観からその地域性を読み解いている。本稿も須山の視点を受けつつ、研究者のみならず地域にかかわる人々への「地域を見る視点」を提供することを意図している。須山とは異なり地域を知る端緒として「地域レイヤード」を位置づける。

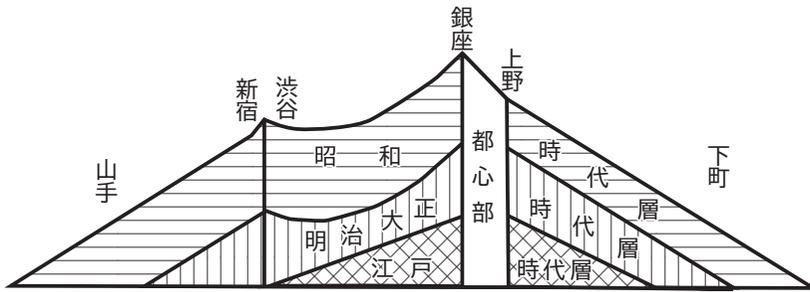
筆者は熊本学園大学在籍時(2016~2021年)に「人文地理学」等の科目にて、田中の地位層に基づき大学周辺の地域的特徴の読み解き方について講義および巡検をおこなっていた。以下、当時実施していた巡検をもとに、地域レイヤードの視点から熊本学園大学周辺の地域的特徴を明らかにする。

熊本学園大学が立地する熊本市中央区大江地区周辺は、熊本中心市街地の東側に位置している。中心市街地とは白川で隔てられているが、住宅や商業施設等が混在する市街地となっている。この地域は後述するように、熊本市中心部から押し出される形で旧帝国陸軍の軍事施設が集積した地域である。また、視点を上げると熊本市中心部の東縁部には戦前期から教育機関が集積する地域でもあった。熊本市の都市拡大の影響を受け、その地域の特徴を変化させてきた地域を事例にその地域レイヤードから地域的特徴を読み解いていく。

2. 田中啓爾の「地位層」と地域レイヤード

田中は、地域的特徴をとらえる際の考え方として、地域の歴史の重層性(重なり合い)を重視した。そして、時間の条件(歴史)により規定される法則性に基づく「地位層」を考案した。田中は「発達段階による差を層位的にとらえ、「地位層」と概念づけた」(田村:1984)。田中は地域の特徴を理解する上で地域性を重視しており、地域にはその歴史が積み重なっていると同時に、各時代の地域性(地域の総合的な性格)が地層のように積み重なっていると考えた。つまり、地域は「各時代の地域性=時代層」が積み重なってできており、それは各時代の地域社会を表している。そうした時代層が積み重なっているものが地位層になる。

第1図は、田中が東京の地位層を説明したものである。これによると中心(この場合は都心部:文化的発信地域)より流れ出た文化的なものが周辺地域へと広がっていくため、中心からの距離に応じてその厚みが異なっている様子が表現されている。江戸時代から昭和に至



資料：田中 (1965) より作成

第1図 東京の地位層

るまで大手町を中心とした都心部がその文化的発信地となり東京の地位層を形作っていることが分かる。成層火山的な発想が背景にあることが理解できる。

地位層の考え方には、地域にある様々な事象についてもその時代性を問うている。地域にある事象には現時点の事象だけではなく、歴史的な事象も存在している。また、今後現れてくる事象も想定している。これら事象は、現時点(田中は生活層とした)に、まるで地層の露頭のように、地域の断面として現れている。これらの発露を5段階層序として整理している(第1表)。

第1表 5段階層序

5段階層序	内 容
未象 Stage01	初象に成長するであろうと推定される未来の現象(まだ表れていないが、これから初象に成長するであろうと推測される未来の事象)
初象 Stage02	将来性のある初めての現象(次に地域を代表するようになると思われる事象, 地域の新しい方向付けとなる事象)
顕象 Stage03	現時点における最も顕著な現象(現在最も地域を代表する事象)
残象 Stage04	過去の現象の残り(かつて地域を代表しており, 現在も見られる事象)
消象 Stage05	残象の消えたもの(かつて地域を代表しており, 現在は消えてしまった事象)

資料：田中 (1965), 田村 (1984) より作成

5段階層序は、現在の最も地域を代表する事象である「顕象」を中心に、過去の顕象であり現在も見られる事象である「残象」、残象が消えてしまった「消象」、生活層に出現したばかりで次に顕象となる可能性のある「初象」、まだ存在していないが今後初象になるであろう「未象」で区分をしている。田中は、地域のこれまでの歴史・地域性の積み重ねである「時代層」と現在の生活層を基準としたそこでの事象の発露に着目した「5段階層序」から地域の特徴を整理し地域性を明らかにしようとしていた。

地域レイヤードは、田中の地位層の考え方を援用し、積み重なっている歴史を現時点の姿から読み解くことで地域の特徴を明らかにしようとするものである。現時点で見られる景観的特徴や機能的特徴を見つけ出し、掘り下げていくところからはじまる。これは5段階層序を援用する。一方、その地域の各歴史的背景(地位層)からその地域の特徴を確認していく。

最後に両者を総合し地域レイヤードを再構成し地域性を明らかにしようとするものである。これらの視点を活かすことで、学生や地元住民が取り組む「地域おこし」などの際に、地域の特徴を見だしやすくすることや、町歩き等でその地域を理解しやすくすることを目指すものである。

3. 熊本市の拡大と東部地域の変貌

1) 熊本市の発展と軍事施設の変遷

熊本の街は明治維新後、対薩摩藩の最前線として新政府にとって軍事的な要衝となった。1871(明治4)年に鎮西鎮台(1873年に熊本鎮台)が旧熊本城内に置かれたのを端緒に、1875年には第13連隊が設置、歩砲工あわせて2,300人が常駐する「軍都」となった。西南戦争(1877年)では県内各所で激戦があり、熊本市街地は焼け野原となった。西南戦争後、市街地中心部の焼け跡に多くの軍事施設が建設された。1885年には熊本鎮台が第6師団となり、熊本の街は九州における軍事的中心地として位置づけられていく。その後、1889年に市制施行され熊本の街は都市としても大きく発達していった。

「軍都」として栄え発展していく熊本市にとって、中心部に立地した軍事施設が皮肉なことに都市発達の障害となっていた。このため中心部に立地するおよそ8万2千坪¹⁾の軍事施設の移転が課題として上がるようになった。当時の中心市街地は軍事施設の周囲に立地しており、さらなる都市成長をするには中心部の軍事施設移転は必然であった。

こうした課題に対し、第3代熊本市長である辛島格(からしまいたる:1854~1913)は、軍事施設の移転に取り組んだ。市街地にある山崎練兵場(5万坪)を市東部の民有地と交換・移転してもらえるよう、1897年に請願を提出。請願は翌98年に受け入れられ、翌99年に市中心部にあった騎兵營・輜重廠が市東部の渡鹿(とろく)へ移転となった。移転跡地は市区改正事業が開始され1903年に新市街建設事業が完成し、新たな中心市街地「新市街」が誕生した。辛島の功績を称え「辛島町」などの町丁名がつけられている。

その後も中心市街地には歩兵第23連隊(約3万坪)が残っていた。その移転は継続的な課題となっていた。移転の動きは1913(大正2)年に歩兵第23連隊の移転建議が出されるところからはじまった。しかし、熊本市の財政上等の問題もあり進まず、1922年になって移転が認められた。1925年、歩兵第23連隊は渡鹿練兵場の西側の3万坪に移転されるが、当時の軍縮の影響を受け都城へ移転、結果として熊本城内にあった歩兵第13連隊が移転することとなった。また、敷地の一部を連隊施設に提供した渡鹿練兵場は手狭となったため、さらに東部の帯山一帯を買収し50万坪といわれる広大な練兵場が建設された。

この移転には第7代市長高橋守雄(1883~1957)の功績が大きいとされている。高橋は警視総監などの要職を務めたあと、熊本市長に就任。在職時に熊本の3大事業である歩兵第23連隊の移転、上水道の敷設、市電の開業を成し遂げた市長として知られる。後述する熊本商科大学(現、熊本学園大学)初代学長となる人物である。

この間、熊本市はその市域を周辺地域へと拡大している。1921年旧熊本市周辺にあった1

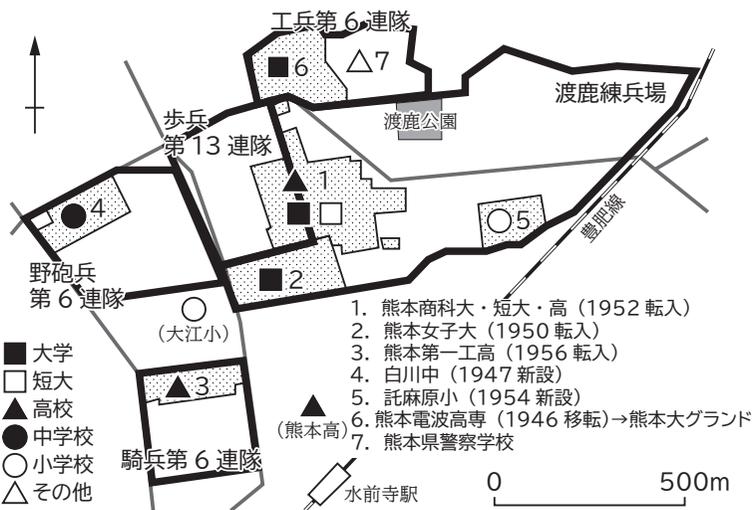
1926(大正15)年の地形図からは現在の熊本大学の前身にあたる第五高等学校(現, 法文学部), 高等工業校(現, 理工学部), 薬学専門校(現, 薬学部), 医科大学(現, 医学部)が立地している。また現在の県立高校の前身である済々黌中学(現, 済々黌高校), 熊本中学(現, 熊本高校)が, 私立ではミッション系の九州女学院(現, 九州ルーテル学院), 九州学院などの中高等教育機関が, 渡鹿練兵場や歩兵第13連隊, 騎兵第6連隊, 野砲兵第6連隊, 騎兵第6連隊の施設を挟んだ南北に立地していることが確認できる。これらは当時の熊本市街地東部の縁辺部にあたる地域に集中的に立地していた(第2図)。

3) 軍事施設跡地への大学等機能の移転

第二次世界大戦後, 不要となった軍事施設の跡地に新制小中学校や後述する当時の熊本商科大学や熊本県立女子大学などが立地するようになる。このように熊本市東部には戦前から多数の教育機関が立地していたのに加え, 大江・渡鹿地区に集中していた軍事施設跡地を利用した文教施設が立地することにより, 熊本市の文教地区へと変貌を遂げている(第3図)。以下, 戦後の軍事施設跡地への文教機能の進出を簡単にまとめる。

- 熊本学園大学

1942(昭和17)年に東洋語学専門学校として熊本市黒髪町宇留毛の白川右岸の地に開校した。戦後, 1950年に熊本短期大学に改組(初代学長, 高橋守雄), 1952年に陸軍歩兵第13連隊・渡鹿練兵場跡である現在の校地へと移転している。その2年後の1954年に高橋守雄を学長として熊本商科大学(現, 熊本学園大学)が開学した。その後1994年に現在の名称である熊本学園大学に改称している。短期大学部は2002年に廃止となった⁴⁾⁵⁾。



資料：今村(2014)より一部改変

第3図 旧軍用地と文教機能との関係

• 熊本県立大学と熊本県立劇場

熊本短期大学が歩兵第13連隊跡地へ移転した同じ1950年に、熊本県立女子大学(現、熊本県立大学)が熊本城内から渡鹿練兵場跡東側(元第16部隊跡地)⁶⁾へ移転してきた。その後、1980年4月に熊本市街地東方の現熊本市東区月出に移転、1994年に共学化の上、熊本県立大学に改称している⁷⁾⁸⁾。移転跡地には熊本県立劇場が1982年に開館、熊本の芸術文化の拠点となっている。

• 熊本高等専門学校

1943年(財)熊本無線電信講習所として設立されたものが学制改革により熊本電波高等学校(現、熊本高等専門学校)となり、1951年に工兵第6連隊跡地の一部に移転してきた(敷地の半分は熊本県警察学校となっている)。1971年に熊本電波工業高等専門学校に改称、1973年に現在のキャンパスである菊池郡西合志町(現、合志市)須屋へ移転している⁹⁾¹⁰⁾。跡地は熊本大学大江総合運動場となっている。

このほかに、騎兵第6連隊跡地の一部に熊本第一工業高等学校(現、開進高等学校)が移転(1956年)。野砲兵第6連隊跡地の一角に白川中学校が開校(1947年)、渡鹿練兵場の一角に託麻原小学校が開校している(1954年)¹¹⁾。また、戦後引揚者等の住宅不足対策として旧兵舎を利用した公的住宅を起源とする県営住宅や公務員宿舎などが戦後建設されその多くが現在も立地している。

4. 熊本学園大学周辺地域の地域レイヤード

熊本市東部の大江地区にある熊本学園大学は、上述のとおり戦前にあった歩兵第13連隊と渡鹿練兵場の一部を利用した場所に立地している。移転から70年を経過する中で、熊本市街地の東縁部であった当地も都市化が進みその姿を大きく変えている。しかし、大学の内外にはかつて軍事施設の名残を示すものや、その後の跡地利用の特徴を示すものなどが残されている。これらは田中の言う「残象」や「消象」といえる。また、都市化が進む中、再開発などにより地域の姿を大きく変えようとする動きもみられる。こうしたものは、「初象」に該当する地域の事象である。

以下、熊本学園大学内外にある地理的事象を5段階層序にもとづきながら分析し、その地域的特徴を明らかにする。

1) 消象・残象としての軍事施設の痕跡

代表的なのが渡鹿交差点から産業道路を東に向かった南側にある「煉瓦塀」と「門柱」である(写真1)(第4図①)。JR九州のマンションと大江こども園の前にあるこれらの遺構は、歩兵第13連隊の「営門」の跡である。産業道路側が営門の外になるため、景観および土地利用も大きく異なっている。「営門」の中に入ると、県営山の上団地、国家公務員合同宿舎(学苑住宅)、そして熊本学園大学付属中学・高等学校が建ち並んでいる(写真2)(第4図②)。

一方、「営門」の外は戸建て低層の住宅地が広がっている。

さらに、熊本学園大学構内には歩兵第13連隊の建物が残されている(写真3)(第4図③)。学生会館裏手の目立たない場所にあるこの建物は、旧歩兵第13連隊の食堂・売店の建物である。現在は第2体育館として利用されている¹²⁾。建物には細かい意匠が施されており、特徴ある建物となっている。

また、県営山の上団地の集合住宅の東側、国家公務員合同宿舎との間に「歩兵第13連隊兵営跡」碑と、歩兵第13連隊が中国戦線での熱河作戦¹³⁾での活躍を記念した「皇威無窮」碑¹⁴⁾がひっそりと残されている(写真4)(第4図④)。

2) 顕象としての軍事施設跡地利用の公的・文教機能

軍事施設が敗戦により不要となったあと、土地利用としては文教機能の立地が進んだ。渡鹿練兵場・歩兵第13連隊跡には、1952年に移転してきた熊本学園大学があり、この地域を代表する顕象として位置づけられる。県立女子大跡地に建設された熊本県立劇場(写真5)(第4図⑤)は熊本県を代表する音楽・演劇などの文化的中心地とした地位を確立している。また、工兵第6連隊跡地西側は熊本大学大江総合運動場(写真7)(第4図⑦)となっている。大江総合運動場の入り口には、この地に熊本電波高専があったことを示す碑が残されている(写真8)(第4図⑧)。その東側には熊本県警察学校(写真9)(第4図⑨)がある。

また、公的な住宅が目立つのもこの地域の特徴である。県営住宅(山の上団地)や国家公務員合同宿舎(学苑住宅)(写真2)、渡鹿練兵場の北西端には国家公務員合同宿舎(渡鹿住宅)などもこの地域の特徴となっている(写真6)(第4図⑥)。歩兵第13連隊の西側にあった野砲兵第6連隊跡地の西端には、国家公務員合同宿舎(白川住宅)(写真10)(第4図⑩)が立地している。

またこの地域には日本郵政スタッフ九州BPOセンター、熊本地方法務局などが入る熊本第2合同庁舎が立地している(写真11・12)(第4図⑪・⑫)。公的・半公的な施設もあり、この地域の特徴を示している。

3) 顕象としての商業施設と初象の出現

熊本学園大学の西側には、ゆめマート大江を核とするショッピングエリアが形成され、多くの利用客で賑わっている(写真13)(第4図⑬)。ここは野砲兵第6連隊跡地であるが、戦後、1949年に専売公社(現、日本たばこ(株))の熊本工場が進出、1993年まで稼働していた。その後、敷地の西側はジョイフルタウンを経て2014年に、ゆめタウン大江(当時)となっている。ゆめマートがこの地域の象徴的存在の顕象となっているのに対し、専売公社工場の痕跡は残されておらず、消象となっている。

一方、専売公社工場敷地の東側には、くまもと森都総合病院(森都病院)と大腸肛門病センター高野病院(高野病院)が、2017年に立地した(写真14)(第4図⑭)。森都病院は市内九品寺地区から、高野病院は同帯山地区から、ともに手狭であり老朽化したためにこの地域へ新築移転してきた。さらに、歩兵第13連隊跡地の北西端には、2017年に熊本県民テレビ

(KKT)が市内世安町から新築移転してきた(写真15)(第4図⑮)。この敷地は戦後公務員住宅や専売公社の社員寮だった場所であった。

総合病院と専門病院やテレビ局の移転は、これまで文教施設・商業施設を中心とするこの地域一帯の性格を変えていく施設である。このためこれら施設は初象と位置づけられる。



- | | |
|------------------|-----------------|
| ① 歩兵第13連隊営門跡(残象) | ⑨ 熊本県警察学校(顕象) |
| ② 県営団地・公務員宿舎(顕象) | ⑩ 公務員宿舎(顕象) |
| ③ 歩兵第13連隊食堂(残象) | ⑪ 日本郵政施設(顕象) |
| ④ 「皇威無窮」碑ほか(消象) | ⑫ 熊本第2合同庁舎(顕象) |
| ⑤ 県立劇場(顕象) | ⑬ ゆめマートほか(顕象) |
| ⑥ 公務員宿舎(顕象) | ⑭ 森都病院・高野病院(初象) |
| ⑦ 熊本大学グラウンド(顕象) | ⑮ 熊本県民テレビ(初象) |
| ⑧ 「電波高専跡」碑(消象) | |

資料：国土地理院地図より作成

第4図 熊本学園大学周辺の特徴と5段階層序



写真1 歩兵第13連隊営門跡
(2020年3月22日撮影,以下すべて高木撮影)
奥が連隊敷地内.



写真4 歩兵第13連隊跡を示す碑
(2020年3月23日撮影)県営山の上団地の片隅に置
かれている。中央の大きな碑が「皇威無窮」碑、右
が兵営跡の碑左は碑移設の経緯が書かれている。



写真2 旧歩兵第13連隊敷地内にある県営住宅ほか
(2019年11月7日撮影)
奥：JR九州の分譲マンション
中：県営山の上団地
手前：国家公務員合同宿舎学苑住宅



写真5 熊本県立劇場
(2019年11月8日撮影)



写真6 国家公務員合同宿舎渡鹿住宅
(2020年3月23日撮影)



写真3 旧歩兵第13連隊食堂を利用した第2体育館
(2019年11月7日撮影)



写真7 熊本大学大江運動場
(2020年3月23日撮影)
写真右の黒い石碑は電波高専跡の碑



写真8 国立熊本電波高等学校跡碑
(2020年3月23日撮影)



写真12 熊本第二合同庁舎
(2019年11月8日撮影)
法務省, 厚労省関係の事務所が入居している



写真9 熊本県警察学校
(2020年3月23日撮影)



写真13 ゆめマート大江と商業施設
(2019年11月8日撮影)



写真10 国家公務員合同宿舎白川住宅
(2019年11月8日撮影)



写真14 移転してきた病院
(2019年11月8日撮影) 左: 森都病院 右: 高野病院



写真11 日本郵政スタッフ九州BPOセンター
(2019年11月8日撮影)



写真15 移転してきた熊本県民テレビ
(2019年11月8日撮影)

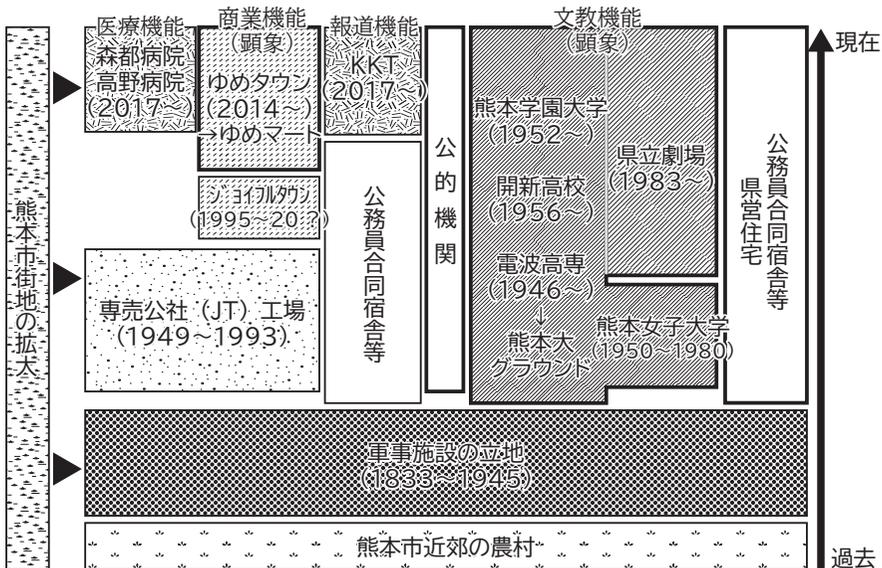
4) 熊本学園大学周辺の地域レイヤード

前述のように、熊本学園大学周辺の歴史的な積み重なりを、田中啓爾の5段階層序に就って整理を試みた。その結果代表的な事象の変遷を模式的にまとめたのが第5図である。時間軸を縦軸に過去から現在にいたる状況を示している。横軸はこの地域の象徴的事象のイメージを示した。

熊本学園大学のある大江・渡鹿地区一帯は、熊本市近郊の農村地帯であった。そこに1833年以降、渡鹿練兵場や歩兵第13連隊といった軍事施設が熊本市中心部より移転してきた。これにより「軍都」熊本を象徴する場所となった。軍事施設はこの地域における顕象となった。それと同時期に、熊本の都市化による市域の拡大にともない、この地も「熊本市」へと組み込まれていった。その後も熊本市街地の拡大に影響を受け続けている地域と言える。

「軍都」としての性格が大きく変わるのが第二次世界大戦の敗戦である。軍隊はその役目を終え、その施設は不要なもの＝残象・消象となった。その跡地に入ってきた機能は、公的な役割を担う機関・住宅、高等教育機関、専売公社の工場であった。これらは戦後期～高度成長期のこの地域の顕象となった。その後、熊本女子大学の郊外移転と県立劇場の建設、電波高専の移転と熊本大学大江運動場への転換などの動きがあるものの、文教機能の集積地としての位置づけは変わっていない。

一方、専売公社の工場が閉鎖されたことにより跡地は消象から未象・初象へと変化した。再開発により開設されたゆめタウン(ゆめマート)を核とするショッピングエリアはこの地の顕象に成長したといえる。また近接地へ2017年に移転新設された2病院は今後この地域に影響を与える初象として位置づけられる。同年に移転してきた熊本県民テレビ(KKT)も文教地区としての背景を活かしながらこの地域の特徴を形作る機能として期待される。



資料：高木作成

第5図 熊本学園大学周辺の地域レイヤード

また、長らくこの地にあった国家公務員向けの住宅群は、国の組織改革や建物の建て替えにともなう高層化などの影響により徐々に縮小傾向にある。今後残象に変わっていくことが想定される。

5. おわりに

本稿は田中啓爾の「地位層」を援用した地域レイヤードを用いて、熊本市東部の熊本学園大学周辺の地域的特徴について明らかにした。この地域の特徴は、戦前期に移転してきた軍事施設とその周辺にあった高等教育機関の影響が強かった。戦後、軍事施設の跡地利用として文教機能の立地が目立ったのも、そうした地域的な特徴が影響していたといえる。また、目立たない存在ではあるが、公務員住宅や県営住宅も軍事施設の跡地利用としてこの地域の特徴に位置づけられる。

一方、戦後長らくこの地域のもう一つの顕象であった専売公社熊本工場が移転となった(残象から消象へ)。その後跡地にゆめマートを中心とする商業機能が整備された。これは未象から初象、顕象へと成長してきた機能である。これらの文教機能と商業機能、公的住宅機能が現在のこの地域の顕象である。また、新たな機能として医療や報道が加わった。これらは初象として位置づけられるが、時代が変わると共に顕象へと成長するであろう。この地域を代表する新たな機能になることが期待される。

戦後80年近くが過ぎ、軍事施設があった事の記憶が薄れていく中、残象として残る歩兵第13連隊営門跡や食堂跡である熊本学園大学第2体育館は貴重な存在である。また軍隊があった事を示す碑も消象となった軍事施設を思い起こすための重要なアイテムである。

このように地域にある事象を地域レイヤードとして捉え、それぞれの背景を解きほぐしながら、熊本学園大学周辺地域の特徴を明らかにしてきた。まちあるきや実習等において得られる視覚的情報(景観)の活かし方の一方策として地域レイヤードの考え方を示した。筆者が担当していた授業では、景観上特徴ある事象に学生が気がつくように注意を払って引率していた。その際には、必ず地形図を携帯させ、現在位置を確認させながら、過去・現在・未来について地域がどのように変化するのか解説をおこなっていた。これを入口として、学生に大学周辺地域への興味を持たせるとともに、地域に対する見方・考え方の定着を意識していた。同様の手法は、本学周辺地域をはじめ、実習等で訪問する地域に対して有効である。ここを起点に地域資源の発見や活用の一助になれば幸いである。

註

- 1) 岩本(1981)による。
- 2) 飽託郡黒髪村、池田村、花園村、島崎村、横手村、古町村、本庄村、大江村、本山村、春竹村、春日町を合併。太江田・蓑茂(2013)による。
- 3) 鄭・辻原(2019)による。
- 4) 熊本学園大学HP(2024年1月6日参照)
- 5) 今村(2014)による。

- 6) 熊本市(1997)による。
- 7) 熊本県立大学 HP (2024年1月6日参照)による。
- 8) 上記5) 参照。
- 9) 熊本高等専門学校 HP (2024年1月6日参照),「国立熊本電波高等学校跡」記念碑碑文による。
- 10) 上記5) 参照。
- 11) 上記5) および白川中学校 HP・託麻原小学校 HP (2024年1月6日参照)による。
- 12) https://www.kkt.jp/kkt/kumamoto_history_archive/ 熊本県民テレビ HP「ヒストリーわたしたちの街」(2024年1月6日参照)による。
- 13) 熱河作戦は現在の中国河北省に対する軍事侵略(歴史学研究会編(1972))。
- 14) 皇威無窮(こういむきゅう)とは、天皇の威光が永遠に続くようにとの意。

参考文献

- 岩本政教：熊本市の三大事業，「新・熊本の歴史」編集委員会編，新・熊本の歴史7 近代(中)，251-264，熊本日日新聞社，1981。
- 今村陽一：戦後日本における旧軍用地の学校への転用と文教市街地の形成について—陸軍師団司令部の置かれた地方13都市を事例として—，公益社団法人日本都市計画学会都市計画論文集，49(1)，41-46，2014。
- 太江田真宏・蓑茂壽太郎：政令指定都市「熊本」の歴史の変遷と現在，熊本都市政策，2，19-26，2013。
- 大塚昌利：地域論への視点，私家版，2002。
- 大塚昌利：渋谷の地域層位，地域研究，48(1)，1-13。
- 熊本市：新熊本史誌 通史編第8巻現代I，熊本市，1997。
- 斎藤功：中央日本における盆地の地域性—松本盆地の文化層序—，古今書院，2006。
- 瀬戸真之・高木亨：地誌学的視点から見た被災地域の時系列変化，日本地理学会発表要旨集，86，188，2014。
- 須山聡：奄美大島，名瀬の都市景観の特徴—景観レイヤーを用いた場合—，駒澤地理，59，1-25，2023。
- 田中啓爾：東京の地位層—地理学における成長—，田中啓爾，第三地理学論文集，田中啓爾先生謝恩記念会，49-58。1965。
- 田村百代：田中啓爾と日本近代地理学，古今書院，1984。
- 鄭一止・辻原万規彦：旧三菱重工業熊本航空機製作所の社宅街における土地利用の変遷に関する研究—熊本市健軍エリアを対象として—，日本都市計画学会都市計画論文集，54(3)，569-576，2019。
- 歴史学研究会編：太平洋戦争史2，青木書店，1972。